

2020年3月29日

主を待ち望む心

四旬節第5主日を迎えました。灰の水曜日からはじまった今年2020年の四旬節は今までにわたしたちの教会が体験したことのない特別な四旬節となっています。本来であれば洗礼志願者の方々を囲んで、枝の主日、聖週間を祝い、主の過越の神秘と復活祭にともにあずかる準備を喜びのうちに進めていくところでしたが、感染症の拡大を防ぐため、多くの方が同時に集まることはできず、個別に対応していくことを余儀なくされています。学校、会社、地域社会においても同様に、大切な行事の中止や延期、日程の調整が続いていることでしょう。突然の長い春休みにとまどいを感じ、自宅待機や自粛が続く中で疲労を覚えている方々もいらっしゃると思います。

そのような中で、特に今日の聖書のメッセージからは答唱詩編130のことばが胸に響きます。

「神よ、深いふちから、あなたに叫び、
嘆き祈るわたしの声を、聞いてください。

神はわたしの希望、心の望み、
わたしはみことばを待ち望む。

イスラエルよ、イスラエルよ、主を待ち望め。
主はすべての罪から、イスラエルを救われる。」

わたしたちは人間の知恵（科学や技術）を大切にしていますが、それにもまして神の知恵—主を待ち望む心—を土台にして信仰生活を建設しています。この困難な状況下で、主を待ち望む心をどのような形で、具体的に、わたしたちの生活で実践できるのでしょうか？

たとえば、一杯のコーヒーをいただくこと、家族や友人と直接会えずに電話で話すこと、昔の写真を整理したりすることなど、日常生活の小さな出来

事の中に、わたしたちは改めて隣人に支えられ、神さまの恵みによって生かされていることを再び見いだすことができます。このような時であるからこそ、できることがあるかもしれません。

日曜日に教会へ集うことはできませんが、〈日常生活のリズム〉の中に短い祈り、神さまに心を向ける時を取るように努めたいと思います。先日、教皇フランシスコは、新型コロナウイルスが全世界的に流行する中で、特別免償を与えるという決定を発表しています。自分に合った方法で実践することもできるでしょう（※詳細は東京教区のホームページをご覧ください）。

<https://tokyo.catholic.jp/archbishop/message/37885/>

「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」（ヨハネ11・3）

今日の福音のなかでラザロの姉妹たちはイエスに告げています。イエスさまは「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである」と答え、わたしたちの世界が直面している病と困難は、決してそれだけに終わるものではなく、わたしたちの生活が神さまのみ旨に叶う本来の人間らしい姿へと変えられていく契機となりうるものである—と告げているように思われてなりません。

心から主を待ち望みながら、この新しい1週間をはじめたいと思います。

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝